



創刊によせて.....	1	第二回特別企画展.....	6
鼎談「芥川賞と直木賞を語る」.....	2	「作家の自筆原稿でたどる〈文学・青春〉展」	
文学館のつどい.....	3	2007年収蔵品展.....	6
対談：村田喜代子さん、迎康子さん		アンケート調査.....	7
朗読：NHKアナウンサーの皆さん		交流ステージ&ワークステーション.....	8
五木寛之さんを招き開館記念特別講演会.....	3	北九州文学協会が創立.....	8
第一回特別企画展「生誕100年記念.....	4	高樹のぶ子さん講演会.....	8
火野葦平・岩下俊作・劉家吉展」		文学館文庫の出版.....	8
映画「無法松の一生」と講演.....	6		
講師 佐藤忠男さん			

創刊によせて

館長 佐木隆三

初めての「館報」をお届けします。文学館がオープンして、すでに四カ月になり、アンケートで好評をいただき、講演などのイベントはいずれも抽選になるほど、多くの方々から申し込みがありました。この創刊号では、それらの催しに紙面を割いております。わたしは開館記念の式典で、「お年寄りから子どもさんまで親しんでもらえる文学館にしたい」と、あいさつをしました。言うは易し、行うは難しで、どうすればそうなるか、智慧を絞らなければなりません。どうか皆さん、よいアイデアを提供してください。



開館記念式典

祝 北九州市立文学館開館

ひとつ考えているのは、「小さな作家たち」を育てる、文章教室のことで、小学校や中学校で、教師が「きょうは作文だよ」と言う、「えーっ？」という反応だと聞きます。それでも一人か二人くらいは、「よし書くぞ」と張り切るそうです。数十人のなかに、文章を書くのが好きな子どもさんが、一人も二人もいてくれるなら、こんな嬉しいことはありません。文才というのは、天性のもので、未来の作家が誕生します。わたし自身も講師をつとめて、北九州文学協会や北九州市立大学などに、助力をお願いしたいと考えています。計画が具体化したら、募集要綱を發表しますので、子どもさんやお孫さんを、文学館へ通わせてください。

また、文学館には「自分史ギャラリー」があります。北九州市と北九州市教育委員会が主催する、自分史文学賞の受賞作を中心に、閲覧することができます。すでに「全受賞作を読破する」と、熱心に



自分史ギャラリー

足を運んでいられる方がおられます。応募者は七十〜七十九歳が最多で、次は六十〜六十九歳です。

お年寄りが本領を發揮する場として、自分史ギャラリーを充実させ、ユニークな講座ができないものかと、あれこれ考えています。どうか四百円の年間パスポートを利用し、文学館へお運びください。

第二回特別企画展

「作家の自筆原稿でたどる
〈文学・青春〉展」

「主な展示資料」

川端康成「伊豆の踊子」自筆原稿、太宰治「斜陽」「人間失格」自筆原稿、三島由紀夫書簡、石原慎太郎「太陽の季節」自筆原稿、大江健三郎「飼育」「個人的な体験」自筆原稿、村上龍「限りなく透明に近いブルー」自筆原稿など。

* 開催期間 3月24日(土)〜5月6日(日) ※5月1日(火)は臨時開館

* 観覧料 一般／400円、中学生／200円、小学生／100円



2007年収蔵品展

3月18日(日)まで開催中

杉田久女、橋本多佳子の掛け軸、色紙、短冊など自筆資料を展示。そのほか、森鷗外の書簡、田中小実昌の原稿なども。

* 入館料で観覧できます。

「芥川賞・直木賞を贈る」

10月12日午後、北九州芸術劇場・小劇場において、原談「芥川賞・直木賞を贈る」をおこないました。いずれも文藝春秋0日の両宮秀彌氏、岡崎正隆氏に、わたし（佐木）が問いかけながら進行役をつとめ、本音をつとらったのです。

早大露文出身の岡崎さんは、「文学界」の編集長をへて、財団法人「日本文学振興会」の事務局長になりました。この財団は、文藝春秋が基金を拠出しており、芥川賞・直木賞の勸進元ですから、もっとも精通した人です。

鹿大仏文出身の岡崎さんは、本づくりの出版部に三十年間もいた人で、専業部長のころは芥川賞・直木賞の授賞式とパーティーの責任者でした。わたしは岡崎さ



んから、単行本と文庫本を五十冊ほど担当していただきました。

二百人が集まった会場には、「受賞者と作品一覽」が配布されており、皆さんはそれを見ながら、聞き入っています。

以下、文責は佐木で、発言の要旨をまとめました。

佐木 そもそも芥川賞と直木賞は、どこがどう違っているのか。

岡崎 これは難問です。二つの賞は、文藝春秋社主の菊池寛が、友人だった芥川龍之介と直木三十五を偲んで、昭和十年に創設したものです。芥川賞は純文学、直木賞は大衆文学ということになっています。

岡崎 私は主に直木賞を担当していますが、芥川賞は難題に発展した作品、直木賞は単行本が多い。芥川賞は票が割れるけど、直木賞は満場一致という傾向はみられますね。

佐木 最終選考の候補作は、どうやって決めますか。

岡崎 同人誌にアンケートを取ったりして、文庫の社内でも三十人くらいが委員会をつくって下読みをします。局長クラスから入社五年の若手まで、見落としがあつてはいけないから一生懸命です。

岡崎 半年ごとの選考会ですが、私が三十年間に読んだ量は、どれくらいにならないうかがい

岡崎 それに各社が、ギリギリになって持ち込む。

岡崎 下期は十一月末で締め切り。佐木さんの「複書するは我にあり」は、昭和五十年十一月二十日の奥付ですが、書店に並んだのは十二月初めで、滑り込みセーフでした（笑）。

佐木 受賞作は、たいがいベストセラーになります。各社は候補作にしろもらつたため、あれこれ売り込むでしょう。菓子折りをもつた、札束が入っていたらどうなるか？

岡崎 そんなことがあれば、私なんか家を四、五軒ほど建てていすよ（笑）。菊池寛が「複書は絶対公平！」と言っているように、悲しいくらい公平ですね。

岡崎 そうでなければ、こんなに長く続いているんじゃないですか。私なんか自分が担当した作家が受賞できず、とだけ口惜しい思いをしたかわかりません。

佐木 これまで選考委員会で難航したのは、どんな作品だったでしょうか。

岡崎 それはやはり第三十四回（昭和三十年下期）の石原慎太郎「太陽の季節」です。石川達三と岡崎聖一が強く押し、佐藤幸夫が「美的節度がない」と反対し、「この場の討論には選考責任を負わない」と断言をされています。

岡崎 百三十五回の歴史のなかで、これほど騒がれたことはありませぬね。

佐木 この作品が「文藝春秋」に載つたとき、私は十九歳で同人雑誌を始めましたが、小劇場の場面に刺戟されて、仲間と腰子を突き刺して被つたことがあります。

岡崎 それは腰子が濡れていたんでしよう（爆笑）。

佐木 受賞作でいちばん売れた作品はどれですか。

岡崎 それは第七十五回（昭和五十一年上期）の村上龍「限りなく透明に近いブルー」で、単行本が二百万部売れました。候補作は雑誌「群像」に掲載されたものですが、すでに講談社は単行本化しており、売れに売れるのを、われわれは指をくわえて眺めていました。

この日の会場には、第百四回（平成二年下期）直木賞を「潔白者のアリア」で受賞した古川薫氏が、下関市から参加しておられた。岡崎正隆さんは、長年にわたって古川さんを担当しており、登壇していただいた。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

吉川 私はずっと下関市を動かす、地方在住の作家だったのに、岡崎さんが面倒をみてくれ、すいぶん単行本をつくってもらいました。岡崎さんからの手紙は、じつに二百通を超えています。

岡崎 地方暮らしのハンディがあるのに、よく諦めずに辛抱をなさいました。

吉川 いや、途中で何回か、「もう沢山だ、直木賞なんか要らない」と、放り出したくなったことがあります。選考会の当日は、テレビ同が中継車を出したりして、今か今かと待ち構えている。それで「残念ながら今回も」と電話がきたとき、がつくりませんでした。

佐木 私も下関市のホテルで、一晩に待機したことがあります。それで電話が鳴ったとき、受賞票を取ろうとして岡崎さんが足を滑らせたから、「あなたの責任だ」と、岡崎さんをいびつたものです（笑）。

吉川 そんなこともありましたね。しかし、ほんとうに岡崎さんには感謝しています。二人三脚でやってきて、ようやく受賞にこぎつたんです。

佐木 やはり私たちは、編集者に助けられて、作家として生きていく。古川さんと共通の知人として、両宮さん、岡崎さんに、心から感謝しています。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

岡崎 古川さんは、直木賞候補になること十回、受賞したとき最高齢の六十五歳。この記録は破られていませんね。

▲文学館の集い

北九州市立文学館開館記念・NHK北九州放送局開局75周年事業(12月6日・ムーブにて・参加者三五〇人)

◆対談「いのちのイメージが生まれるとき」

お話し：村田喜代子さん

(芥川賞作家)

聞き手：迎康子

(NHKラジオ深夜便アンカー)

迎 この対談は12月24日、クリスマスイブの午前四時からラジオ深夜便、「このころの時代」で放送されますが、普段、村田さんは夜はどう過ごされますか。

村田 夜は大好きなんです。今夜が長いのでとても幸せ。晩酌やったりしながら十二時ごろになると勿体なくて、友達に電話をしたりすると三秒で出てくれる人がいるんですね。夫は八時ごろには寝てしまい、犬も寝てみんなを寝かせてそれから私の幸せな時間がはじまります。

迎 村田さんの作品世界って不思議な空間が展開されるので、夜中に書いてらっしゃるかなと思っ

ていたんですが。村田 夜は晩酌の時間であり電話の時間なんです。夜は書きませ

ん。余程締め切りが間に合わない以外は、私は暗いのが嫌いなので夜に飲みに行くとか食事に行くとかしません。明るい家にいるのが幸せな時間なんです。明るい昼間も好きで、昼は外に出たいし、夜は家について晩酌する。では、いつ書くかというところが。

迎 いつお書きになるんですか。村田 早朝に書く作家もおられます。私も朝四時に起きて三時間ぐらい書くというのことにしたいと思いますが、今は昼間ですね。割り

迎 今、村田さんの関心のあることはなんですか。村田 大きく言えば環境汚染とか、化学物質の影響ですね。アメリカでは食品添加物の影響で、死

体が腐りていくなっているとか。せめて、私の周りでは手作りをしようと思つてます。今日も朝から燕を煮てきました。海老と一緒に炊くと美味しいですよ。

迎 村田さんのイメージは、作品世界に不思議が満ち満ちているので、結婚して夫の世話を子どもを育てるといふ家庭的イメージではないですが、実はまめめらしい主婦でいらつしやるんですよ。村田 子どもは頃ママコトが好きで、その延長上で生活できればありがたいなと思つていたの。

迎 だから主婦業も遊びの感覚でやつてるといふか。

村田 そうですね。したい時はするし、したくない時はしない。男性は会社で定年があるのだから、女性も家事の定年があつていいのではないのかしら。

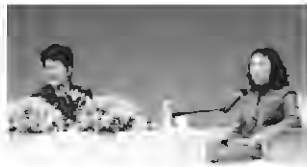
迎 そうやつて「藤野行」を書かれたわけですね。

村田 あの頃はまだ四十代で、死ぬことは考えていないし、夫は現役だしまだ子どもが家にいて家人の世話で大変な時でした。嫉妬などまだ実感が無い世界で、だから一生懸命になつたということもありましたね。今だつたら六十二にな

りましたから身につまされて書かないかもしれせんね。「藤野行」は遠野の美際にあつた嫉妬の話です。六十になると自らそこに行くわけですが、毎日農作業の手伝いに里に下りてくる。「楳山節者」は行つたりなりなんですが、こちらは里に下りてきてこの生きたり

死んだりする感覚が私には新鮮だつたの。人間の尊厳が損なわれずに嫉妬が行われているという

か。それが雪で閉ざされるよ



うになると下りて来られなくなつて、日々の糧を得られなくて死んでいくということなんです。自分が六十になつたときはこの小説が迫つてきて、ああ、もう死ぬんだなと。今年は死後二年目ということになります。

迎 この「藤野」は村田さんがお付けになつたんですね。村田 ほんとうはセンマイなの。あの綿毛が雪に埋もれているおじいさんおはあさんの白髪をイメージしている。でもセンマイ野ではおかしいので「藤野」に。

迎 方言も独特ですね。村田 東北の話に限定したくなかつたので、東北弁を使わずに言葉を考えました。古語を入れて語尾を変えて他にない言い回しにしたの。

以下略

◆朗読



NHKアナウンサーの皆さんが北九州ゆかりの作家の作品を朗読しました。朗読が始まると会場は作品世界に一変。情景が目に見え、力演に惜しめない拍手が送られました。

三上たつ次アナウンサー
・火野葦平「花と龍」

・劉黎吉「阿蘇外輪山」
迎康子アナウンサー

・村田喜代子「藤野行」
垂水千佳アナウンサー
・リリー・ラングラー「東京タワー」
和田源二アナウンサー
・松本清張「左の腕」

▲五木寛之氏を招き
開館記念特別講演会

11月13日、作家の五木寛之氏を招き、北九州芸術劇場・大ホールで、「開館記念特別講演会」をひらきました。定員二百人の会場が満員で、演題は「もう一つの明治」。もともと集客力のある作家として知られる五木氏は、手荷物を下げて一人で訪れ、「小倉に誘われると断りきれなくてね」と、いつもの穏やかな笑顔です。

五木氏のお父さんは、小倉師範学校の出身で、「国漢」の教師になり、植民地時代の朝鮮に赴任しています。講演でお父さんのことも話題にし、明治と昭和の時代を比べながら、「日本人論」になりました。重厚なテーマをユーモアをまじえての展開で、一時間半の予定が十五分延長しても、だれも席を立たない魅力ある内容でした。

▲第一回特別企画展「生誕100年記念 火野葦平・岩下俊作・劉寒吉 展」



○会期11月1日～1月14日まで
○展示資料 約二百点
○来場者数 四〇三五人

火野葦平

火野葦平の河童志向がいつのころから始まったかは定かではない。

「幼いころ、兄の葦平と二人で、父、玉井金五郎の腕枕で聞いた寝物語りは忘れがたい。父は、河童の手が、ニヨキニヨキと伸びて、二里も三里も先の物を取つてくる話など、妖怪変化が登場する話をよくしてくれた。外題は毎晩変わった。あとでわかったのだが、それは全部父の創作であった。」
実弟、玉井政雄から聞いた話である。

考えてみると、火野葦平ほど、近代国家への道をひたすら懸命に歩いて来た、小国日本民族の体臭を身につけた作家も珍しい。ホッネで生きようとすればするほど、反指定として、国家や家が行手をばむ。葦平の生涯は、その国家や家に殉じようとする、もうひとりの自己との闘いであった。火野葦平にとって「河童物」は、そうした闘いの狭間にあって、ホッネの嘔吐を可能にする、数少ない回路だった、と言つてもよいかも知れない。

葦平は、河童王国にひとり住むことをきらって、多くの友人知己を誘ったが、それは、孤狼の裏返し、の所業に他ならなかったのでは

はないか。

毎年催された、あの賑やかな河伯洞の新年宴会のさ中であつたさえ、葦平の孤独は深まっていたのではないかと、思うことがある。

晩年上梓した「河童曼陀羅」に転載されている色紙も、その一つである。

中央に、葡萄やバナナなど移りの秋の果実を山盛りした朱塗りの大皿を据え、右手前に、細身の洋酒瓶。瓶に貼られたレッテルには、河童が描かれていて、次のような讀が、空白を埋めている。

レッテルはかなしからずや／そらたかく／秋ふかければ／もろもろの果実みのりて／うづたかくうつはにあれば／そのにほひ／かぜにかほりて／そのいろいろのめい／たかなし／めひからし／うでたか／くふり／たうべんところあせれど／びいどろの／びんのおもてに／はられたる／かみのせかいに／いづべくも／あらぬおもひは／しゆくめいの／いのちかなしや／げにびいどろのレッテルはかなしからずや

近代作家の中で葦平ほど、歴史の烙印とも思えるレッテルを貼られ続けた人も稀である。戦前は「赤」、戦時中は「国民的英雄」、戦後は「戦争協力者」。しかし、その狭間にあって、葦平の胸中に

発酵しつづけたものは、一貫して、日本の近代化を底辺で支えた庶民群像に対する、いとおしみの情だつたように思えてならない。

「養尿管」も「麦と兵隊」も、「花と龍」も、その酵母菌から誕生した作品ではなかったか。近ごろ、しみじみ、そう感じるようになった。

この色紙が「江戸表」（東京阿佐ヶ谷、中山省三郎邸）に於いて描かれたのは「しようわ じゅうごねん くがつにじうはちにち」。「兵隊三部作」によって「国民的英雄」の名声を博していたころのことであつた。

没後四十六年経った今も、「戦争協力者」のレッテルは剥がされていない。葦平の嘆きは深い。まことに、「しゆくめいの いのちかなしや」である。拙著『檣樓の人』も「河伯洞祭掘」も、そのレッテルを剥いで、実像に迫る営為に他ならない。それは、無念の死を遂げた火野葦平という作家に献じる白菊の花であるばかりでなく、近代化を急ぎ過ぎた小国日本がたどった歪みに迫る営みの第一歩である。

梶島正男

梶島正男氏は12月21日早朝、ご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

岩下俊作

岩下俊作は、その全生涯を通じて実に多岐にわたる文学の魅力ある主題を追って、遅しく前進した作家であつた。

十代の頃、すでに短い戯曲や創作を書いて、文学への早熟を見せているが、卒業後、折からの不況で就職難などの苦澁をなめる。

その岩下の支えとなつたのが詩であつた。八幡製鐵所に就職した岩下俊作は、劉寒吉、草木原触目、芥屋礒比古と創刊した詩誌「後体発光」「とらんしつと」に、「不発魚形水雷の航程表」「詩人の備忘録」などの実験的な詩を次々と発表、また詩論「汎力動詩派の詩」などを発表して、自ら熱い発光体となつた。

「とらんしつと」に十七号から参加した火野葦平が、詩集「山上軍艦」を出版して出征、「養尿管」で第六回芥川賞を受賞して異例の戦地受賞となつたことは、岩下俊作に大きな刺激を与え、詩から小説へ転向の契機となつた。岩下俊作は、明治・大正の小倉を舞台に、無骨な車夫の哀切の愛の一生を描いた「官島松五郎伝」で「改造」に懸賞応募して、佳作入選となる。

「官島松五郎伝」は、更に「九州文学」と「オール読物」に改作

発表されて、第十回と第十一回の直木賞最終候補となり、惜しくも賞は逸したものの、昭和十七年、文学座により初演され、翌十八年には、伊丹万作脚色・稲垣浩監督、阪東妻三郎・園井恵子主演の映画「無法松の一生」として大映より上映され大ヒットして行くのである。

岩下俊作は、「九州文学」に江戸時代の算法家の師弟愛を描いた「算額問答」や、長編「西域記」を七年間十三回にわたって断続連載したほか、「大衆文芸」に、対馬通いの船頭の心意気を生きたりと描写した「対州まだらの唄」を発表、製鉄所に働く自らの体験をこめた「青春の流域」を書き下ろし刊行するなど、九州の風土と労働の姿を力強く描いた。

戦後は、全国に先駆けて志摩海夫とともに詩誌「浪漫」を創刊、社会風刺の詩を書く一方、八幡製鐵創作研究会を作つて、後進の指導にあたり、晩年には、青木新六と詩誌「たむたむ」を創刊するなど、若い人たちへ発表の場を作つた。

昭和三十三年に東宝が再映画化した三船敏郎主演の「無法松の一生」が、第十九回ベニス国際映画祭でグランプリを受け、大きな話題となり、イタリアのモンダド

ーリ社「無法松の一生」のイタリア語版「*ITOMO DEL RISCOLO*」が出版された。これはイタリアにおける近代日本文学の紹介のトツプを切つての出版であった。

また、舞台と映画でそれぞれ初演した丸山定夫・園井恵子が「苦楽座」でも「無法松の一生」を演じて戦時下の各地を巡回、広島原爆に被爆した事も、いたましい事であった。

そして、この映画が戦時中と戦後の検閲によつて、二度もカットされた事から、その復元朗読による白井佳夫のパフォーマンスが続けられた。宝塚歌劇団によるミュージカル化など、原作が誕生して六十数年を経た今も、各方面に愛され、「無法松の一生」は、今や、国民的遺産となつた感があるが、今日のシルクロードブームの六十年も前に、戦時の言論統制の下で、黙々と西域への思いに文学の営為をかけた岩下俊作の「西域記」は、もっと再評価され、研究されてよいのではないだろうか。

平成九年、遺族の熱意により北九州都市協会から刊行された「岩下俊作選集」全五巻が、岩下俊作が開拓した真の大衆文学の清々しい全貌を垣間見せてくれる。

柏木恵美子

劉寒吉

劉寒吉の小説家としての本領は、市井ものの作品に見られる。劉が私淑した小説家の宇野浩二も「劉さんの作品では短編集一冊も「劉さん」がいいです」と賞揚した。表題作のほか「靴」「三寒四温」「翁」などの九編が収録されているが、いずれも題材を市井にとり抑制のきいた手堅いリアリズム手法による作品である。

郷土小倉に材をとつた小説に、小笠原藤助の「紫川の霧」「脱藩惣勢三百五十八人」、長州戦争のとき的小笠原家老島村志津摩にせまる「山河の敵」、昭和初期の北九州港町での市議選の人間模様「人間競争」、蓮門教をえがいた「神の火」、教育者杉山貞の生涯をつづる「以呂波説本」などがある。

後年、歴史小説を手掛けたが、九州をこよなく愛する劉は、九州の武将をえがき、「天草四郎」「黒田騒動」「竜造寺党戦記」大友宗麟の「西国の獅子」、それに俳人種田山頭火をしのぶ「旅の火」、歌人宗不早をえがいた「阿蘇外輪山」などの長・短編がある。

また、劉寒吉はすぐれた現実主義者であった。

「九州文学」の創刊から休刊までの四十五年の間、劉が同誌の大黒柱として重責を果たした得たの

は、深い洞察力、強い統帥力、温かい指導力によるものであった。「九州文学」誌が発行上の危機に陥ると、すずんでこれを救い、同人の作品発表の場だけでなく、新人発掘のための場としても提供した。同人たちの単行本に題字や跋文を書き、九州各地で聞かれる出版記念会に出席して、その意義を讀めた。

その一方で、旧小倉市時代から工業地帯の北九州が文化の沙漠と呼ばれることを歎き、北九州市が発足すると、文化施設の建設委員長になり、森鷗外旧居の保存に熱意を燃やし、復元が完成すると北九州森鷗外記念会の会長に就任した。

そのほか、北九州文化財展覧会実行委員長、北九州の文化財を守る会の常任理事、小倉南区頂吉地区の民俗調査団の本部長となつて「頂吉民俗調査報告書」を刊行、また市立郷土資料館運営委員長をつとめた。

さらに、柳川の生んだ詩人で、劉が師と仰ぐ北原白秋の生家保存など、地域に根ざした文化活動にも貢献した。

九州の菊池寛と評される所以である。

七十一歳のとき、「西日本における文学活動と地域文化の推進

に尽くした功績」により西日本新聞社から第三十六回西日本文化賞を受賞した。

書は独特の風格を持ち、興がわくと自作の短歌や俳句を色紙に書き、「九州文学」同人の単行本の題字に使われ、石碑などにも揮毫した。また、よく推戴された短文の名手で、文学碑に見られる。「小説は自身との戦いである」と強調していたが、晩年は多忙のために「世のため人のため」の廃業を宣言しても、頼まれては断られず、その自由はついに与えられなかった。

強度の近視で、丸ぶちの眼鏡に渦巻くレンズがトレードマークであったが、その奥にひそむ瞳は象の目のようにやさしく、いつも片すみの椅子を愛する人柄は、彼を知る人びとから、おもてでは「劉先生」と尊敬され、うらでは「劉さん」と呼ばれて、慕われ続けた。

田中九州男



▲映画と講演(参加者四百人)
講演「日本映画の伝統と無法松」
講師・佐藤忠男さん 日本映画
学校校長

映画「無法松の一生」
1958年
監督・稲垣浩、主演・三船敏郎、
ベニス国際映画祭グランプリ
受賞



1月7日、特別
企画展のイベント
として映画と講演
を小倉井筒屋バス
テルホールで開催
しました。講師の
佐藤さんの「無法松は、日本映画
で伝統的に描かれてきた男らしさ
の例外で、むしろ西洋の騎士道に
通じるところが新しい。」など楽し
いお話の後、映画を鑑賞しました。
懐かしい名作に、笑いあり涙あ
りの上映会となりました。

▲第二回特別企画展
「作家の自筆原稿でたどる
『文学・青春』展」
川端康成、三島由紀夫、太宰
治、大江健三郎など、作家の直筆
資料を展示

北九州市立文学館では、第二回
特別企画展として「作家の自筆原
稿でたどる『文学・青春』展」を
開催します。「青春」をテーマに、

約70名の作家と作品を紹介。青
春を描いた作品や、作家が青春時
代に執筆した作品を、1920年
代以降の文学の展開に沿って展示
します。日本近代文学館の協力の
下、作家の自筆原稿や書簡、単行
本などを出品する予定です。是非
ご覧ください。

「主な展示予定資料」
— 第1部「愛と性」

川端康成「伊豆の踊子」自筆原
稿、伊藤整「若い詩人の肖像」自
筆原稿、三島由紀夫 坂本一亀宛
書簡、吉行淳之介「驟雨」自筆原
稿、石原慎太郎「太陽の季節」自
筆原稿、新川和江「わたしを束ね
ないで」自筆原稿、三浦哲郎「忍
ぶ川」自筆原稿ほか

— 第2部「思想と社会」
葉山嘉樹 獄中記メモ、小林多喜
二「蟹工船」自筆原稿、中野重治
徳水直宛書簡— 獄中から、小田
実「何でも見てやろう」自筆原
稿、高橋和巳「憂鬱なる党派」自
筆原稿、三田誠広「僕って何」自
筆原稿ほか

— 第3部「戦争と青春」
堀田善衛 芥川比呂志宛はがき、
中村真二郎「物語のために」序詩
十篇— 詩稿、福永武彦「告別」
自筆原稿、野間宏 坂本一亀宛書
簡、梅崎春生「桜島」自筆原稿、
大岡昇平「武蔵野夫人」訂正稿

(坂本一亀宛書簡中)、安岡章太郎
「悪い仲間」自筆原稿、丸谷才一
「笹まくら」自筆原稿ほか

— 第4部「青春彷徨」
中原中也 長谷川泰子宛書簡、太
宰治「人間失格」「斜陽」自筆原
稿、井上靖「闘牛」自筆原稿、遠
藤周作「白い人」自筆原稿、大江
健三郎「飼育」個人的な体験」自
筆原稿、五木寛之「蒼ざめた馬を
見よ」自筆原稿、庄司薫「赤頭巾
ちゃん気をつけて」自筆原稿、村
上龍「限りなく透明に近いブルー」
自筆原稿、高樹のぶ子「光抱
く友よ」自筆原稿、山田詠美「ソ
ウル・ミュージック・ラバース・
オンリー」自筆原稿ほか

▲2007年収蔵品展
1月16日(火)より3月18日
(日)まで、企画展示室において
「2007年 収蔵品展」を開催し
ています。

収蔵品展では、常設展示で紹介
しきれない収蔵資料のうち、ぜ
ひ、ご覧いただきたいものを、紹
介していく予定です。今年も、例
年北九州市で行われ、第6回を
迎える全国女性俳句大会の開催
(3/3~4)に合わせ、俳句に焦点
をあてた展示を行います。
女性俳人のさきがけと言われる
杉田久女は、結婚後、小倉で俳句
をはじめました。今回は、その久

女を一躍有名にした句「笥して山
ほととぎすほしほしほし」を揮毫し
た掛け軸を展示しています。能筆
として知られる筆致をお楽しみみく
ださい。また、久女は美術や手芸
の才能にも恵まれ、絵もよく描き
ました。自らデザインし、刺繍や
彩色をほどこした帯絵は、鳳凰や
四季の花々をあしらった華麗な大
作。その画才を伝えます。

同じ頃、久女から俳句の手ほど
きを受けたのが、小倉中原、横山
荘の女主人橋本多佳子です。二人
の交流を伝える資料として、久女
が横山荘の橋本家へ贈った直筆
の色紙や、多佳子が、久女を偲ん
で詠んだ句などを紹介していま
す。

多佳子については、遺愛の品々
も多くご寄贈いただいております、今
回はそこから文机や書棚として
活用していた飾り棚を展示してい
ます。静かな句作の雰囲気を感じ
ていただければ、と思います。
野村喜舟、横山白虹をはじめ、
北九州ゆかりの俳句作家の資料も
多数展示しています。特に、横山
白虹については、その多岐にわた
る交誼から山口誓子や西東三鬼な
どとの連名による資料を、お楽し
みいただけます。
このほか、森鷗外(史伝もの)の
代表作「淡江抽斎」に関する書

簡や、コミさんの愛称で親しまれ
た田中小実昌の原稿などを展示し
ています。ぜひ、ご覧ください。



2007年収蔵品展 エントランス

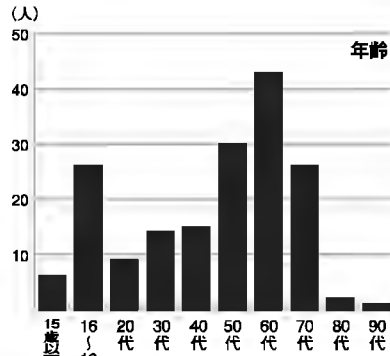
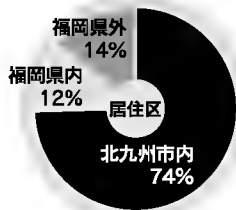
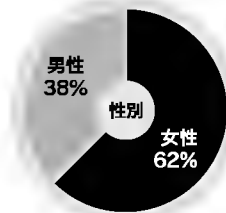


2007年収蔵品展 館内

アンケート調査

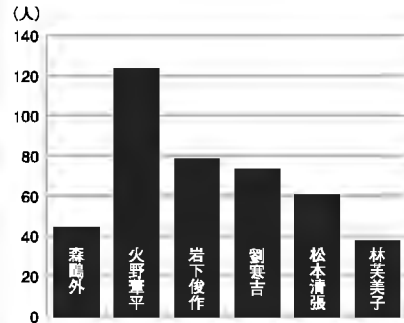
北九州市立文学館では、開館より来館者の方を対象にアンケート調査を実施致しました。来館者の声として、今後の館の運営の参考にさせて頂きたいと思っております。(回答者数188人)

【来館者について】



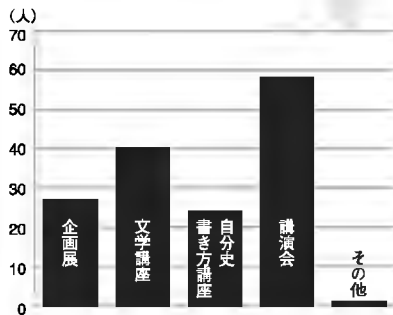
来館者は、男性よりも女性のほうが多く、年齢は50代、60代、70代の層が中心となっている。学生の団体見学もあるため、16～19歳の層も多くなっている。居住地は、市内在住者が4分の3を占めている。

【印象に残った作家について】(複数回答)



開館記念特別企画展として取り上げた、「火野葦平」「岩下俊作」「劉重吉」の三人が最も印象に残っている。また、全国的に名の知られる「森鷗外」「松本清張」「林芙美子」なども注目を集めた。

【今後取り上げて欲しい企画】(複数回答)



希望するテーマ

企画展テーマ

- ・北九州のサブカルチャー
- ・女性俳句
- ・林芙美子
- ・郷土の作家
- ・杉田久女
- ・児童文学
- ・同人誌
- ・森鷗外
- ・漫画家(松本零士など)

文学講座

- ・森鷗外
- ・杉田久女
- ・火野葦平
- ・佐木隆三
- ・俳句

講演会

- ・リリー・フランキー
- ・古川薫
- ・佐木隆三
- ・五木寛之
- ・遺族の思い出話
- ・浅田次郎
- ・児童図書
- ・よしもとばなな

講座、講演に希望が集まった。「森鷗外」など文学史に名を刻んだ作家の文学講座や現在活躍中の作家の生の声を聞きたいとの要望もある。また、漫画など新しい分野での企画を望む声も見られた。

【感想、意見など】

- ・ 企画展がやはり印象的でした。直筆の原稿と言うのがこれほどまでに訴えかける力があることにも驚きました。双方が送った手紙からその関係、友情に思いを馳せることができ、実際に読んでみたいと思うようになりました。(20代 女性)
- ・ 一人の作家を細かく取り上げてもらいたい。映像による紹介が少ない。専門家だけが来館するわけではないと思うし、また子どもを対象とした紹介の仕方も工夫してほしい。将来を担う人材の育成にもつながると思われる。(60代 男性)
- ・ かたたくるしいだけでなく、楽しい企画で(切り口も含め)文学ファンをふやして下さい。期待しています。(40代 男性)
- ・ 遠藤周作や曾野綾子など九州人以外の作家のことも少

し紹介してほしい。火野、岩下、劉らの作品は中央図書館でも冊数が殆どなく借りにくい。増やしてくれるよう交渉してほしい。(60代 女性)

- ・ 漫画家(北九州出身)の作品も子どもだけでなく親も楽しんでまた来てみたいと思うのではないのでしょうか。(40代 女性)
- ・ 今後はボランティアでの解説者など地道に育成して、子どもたちにもわかるような展示を考えてほしい。(60代 男性)
- ・ 北九州の多くの人が文学について熱心に取り組んでいることがわかり、何か大きなものに打たれたような気持ちになりました。あと、こんなにも有名な作家をあまり知らないことがわかり、もっと多くの本を読みたいと思いました。(10代 女性)

交流ステージ & ワークステーション

北九州市立文学館では、地域の文芸活動支援のため、北九州市及び北九州近郊を活動の拠点とし、文芸活動を行う団体を対象に、交流ステージ・ワークステーションの貸し出しをしています。

交流ステージでは、文芸活動の発表会、ミニイベント、講座、講演会、または文芸の振興に関わる書籍、雑誌、書画、写真、その他作品の展示などにご利用いただけます。

ワークステーションでは、文学文芸に関する集会、合評会、読書会、ポランティアの活動(読み聞かせ、絵本や紙芝居の作成などのワークショップ)にご利用いただけます。

可動壁を使うことで収容人数50名程度の部屋をつくることができ、壁を収納すれば更に広い会場として利用することもできます。

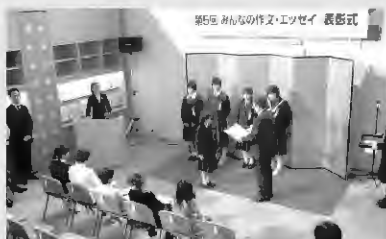
どちらも貸し出し料は無料です。利用方法や予約など詳しくは文学館事務室(093-571-1150)までお問い合わせ下さい。



11月28日(交流ステージ)
福岡県詩人会「秋の詩祭 in 北九州 ～扉をおして～」
詩の朗読会と長谷部奈美江氏による講演「揺れつづける私と言葉の(現場)」約60人



12月1日(交流ステージ)
北筑高校見学会
副館長による解説と館内見学 40人



12月3日(交流ステージ)
2006「第5回みんなの作文・エッセイ」表彰式(九州電力株式会社北九州支店主催)入賞者への賞状授与
60人



12月16日(ワークステーション)
常盤読書会(月一回)
テキストをもとに語り合っている 6人



12月17日(ワークステーション)
同人誌「小さい庭」の例会(次号の編集会議など) 6人



12月19日(ワークステーション)
八幡高校文芸部生徒が館長に取材 7人



12月22日(交流ステージ)
NHK「こんにちは80ちゃん」ラジオ生中継、インタビュー(館長、京町通りの皆さん、清張の会の皆さん)元NHK小倉放送局劇団の皆さんによる「無法松の一生」朗読劇 約50人



3月15日号及び
びホームペー
ジに掲載。

※申込み方法は、市政だより

日時：4月17日(火)午後1時～3時
場所：北九州芸術劇場・小劇場
作家高樹のぶ子さんと佐木館長の対談形式による講演会。また、高樹さんの作品朗読を予定

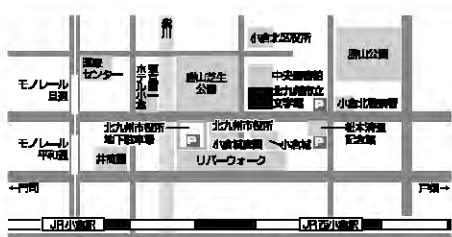


「北九州文学協会」創立
北九州地域の文筆家が相互の研鑽と交流を目的に10月12日「北九州文学協会」を創立しました。会長は同人誌「周炎」編集長の山下敏克さん。会員84人で、会報の発行、合評会、講演会などに取組まれる方針です。



発行 2007年3月1日
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区城内4-1
TEL 093-571-1505
http://www.city.kitakyushu.jp

■開館時間
火～金 9:30～19:00(入館は18:30まで)
土・日・祝 9:30～18:00(入館は17:30まで)
■休館日
毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始



■JR小倉駅より徒歩16分 ■JR西小倉駅より徒歩10分 ■北九州府庁前(バスより徒歩2分)
■北九州市都市高速大手ランプより2分 ■駐車場は文学館裏の各駐車場をご利用下さい



第1号
定価1000円(税込み)

文学館文庫の出版
現在書店ではなかなか入手できなくなった北九州ゆかりの文学者の作品を出版し、販売しています。

印刷番号：08311108 R100 古紙配合率100% 再生紙を使用しています。